

※ この試験問題は参考になるところを抜粋しています。

令和2年度

後期日程入学試験問題

## 総合問題 A

### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子（21 ページ）には、解答用紙（地域創生学部3枚・生物資源科学部2枚）及び下書き用紙（両面印刷）が挟み込んであります。試験開始の合図があったら、直ちに中を確かめ、印刷や枚数の不備などがあった場合、監督者に申し出なさい。
- 3 受験する学部によって指定された箇所の問題に解答しなさい。

地域創生学部	3-13 ページ
生物資源科学部	15-21 ページ
- 4 問題冊子の間に挟み込んである解答用紙を取り出し、受験する学部のすべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入しなさい。
- 5 解答はすべて、受験する学部が指定する解答用紙の所定欄に横書きで記入しなさい。間違っても他の学部用の解答用紙に記入しても、回収しません。
- 6 句読点は、一字と数えなさい。
- 7 試験室で配付された問題冊子等は、提出する解答用紙をのぞいて退出時に持ち帰りなさい。

このページは白紙です。



課題文①は『日本の若者は不幸じゃない』、課題文②の〈A〉〈B〉及び〈図〉は『宿命を生きる若者たち』の一節です。これらを読み、以下の問いに答えなさい。

問1 課題文①において、若者の努力と上の世代の努力には、どのような違いがあると述べられていますか。150字以内で説明しなさい。

問2 課題文②〈B〉下線部(1)に「高原期の時代」とありますが、これはどのような時代だと考えられますか。課題文②〈A〉の語句を用いて、40字以内で説明しなさい。

問3 課題文②〈B〉下線部(2)に「たとえ劣悪な環境にあったとしても、その状況に対して不満を抱かなくなります」とありますが、それはなぜですか。筆者の考えを200字以内で説明しなさい。

問4 12～13ページの〈図〉は、生活に対する満足度の2018年までの調査結果をグラフ化したものです。あなたはこのグラフが今後10年間でどのように変化すると考えますか（変化せず横ばいというケースを想定してもよい）。課題文①・②を踏まえて、300字以内であなたの考えを述べなさい。

## 課題文①

若者とひと言で括<sup>くく</sup>ってみても、言うまでもなく時代によって若者像は変化していきます。そして、今の若者が不幸だと見なされる理由の最大のものは、従来の価値観で見ると不幸としか感じられないような状況下に若者が置かれているからではないでしょうか。景気は悪く、社会制度においては上の世代のツケを回され、そしてかつては多くの人があるところを歩んだような、いい大学からいい会社、そしていい家庭というルートにもなかなか乗れない……。それゆえに年長者を中心に、若者は不幸と捉えられている面が大きいでしょう。

しかし、現在の若者の多くはすでに好景気を知らないような世代なのです。だから、かつては当たり前だった人生設計のあり方も今は異なる形へと変容しています。経済的には生まれたときから不景気だけれども、そんな状況だからといって若者の大半がそれで傷ついて不幸になっていると考えるのは早計です。もちろん景気が良くなることは大歓迎ですが、それを待っていても仕方がありませんし、経済状況が良くなくても幸せを感じている若者は無数にいるわけです。(中略)

いい大学に進学するために受験勉強をする。いい会社に就職するために就職活動をする——このような人たちはちょっと怠けているようなとき、親や教師から「そんなことではダメ、将来どうするつもりだ?」と叱られた経験があると思います。「将来どうするつもりだ?」は、「10年後、20年後のことを考えなさい」と読み替えることができます。これは、「10年後、20年後のことが不安なのは不幸なこと」という考え方に裏打ちされた言葉です。

しかし、“失われた10年”を経て、上の世代は「あなたは将来どうするの?」と言えなくなってしまいました。この時期、経済の成長に下支えされていた、それまで自分たちが確実だと思っていたものが脆<sup>もろ</sup>くも崩れてしまったのです。「山一証券に入れば生活も将来も安心」と思っていたら、その山一<sup>つぶ</sup>が潰れてしまったわけですから。金融業界はある時期まで多くの人憧れる職種であり、生活の安定も保証されていましたが、“失われた10年”からさらに10年ほど経ち、いまや金融業界に就職することは非常にギャンブル性が高いことになってしまっているような気がします。そして、それは金融業界に限ったことではありません。

今は、さらに不景気な時代に突入しており、大手企業だから潰れないとはとて

も言えない状況にあります。JAL や武富士が経営危機を迎えるなんて、20 年前の人に話してもけっして信じてもらえないでしょう。つまり、今の時代、10 年後、20 年後の不安を完全に取り除くことは不可能です。若者だけではなく、大半の人々が10 年後、20 年後の確実な未来を想像することができなくなってしまったのです。(中略)

不況の時期に当たり前のように育った若者たちは身の丈にあった人生設計、すなわちイメージしやすい1 年後、2 年後のことを考えて動くようになっていると思います。

不透明な10 年後のことを考えても意味がない、ならば確実な1 年後のことを考えていたほうがいい。それが今の若者たちの考え方なのです。

戦後、終身雇用制度が確かなものとしてあった時代は、新卒で就職さえすれば、一生会社が面倒を見てくれていました。一方で、就職というレールを踏み外してしまったらお先真っ暗。もう明るい人生を歩むことはできないのではないだろうか。日本人の多くがそう考えていたと思います。

しかし、今は会社に就職していようが何をしていようが、10 年後はわからない時代です。いつ会社をクビになるかもしれないですし、会社そのものがなくなってしまってもいいかもしれません。

昨今、就職した若者の離職率が高いと言われていています。新卒で就職しても、3 年もしないうちに会社を辞めてしまう人が大卒の場合は全体の3 割にも及んでいるのです。しかし、これは当たり前のこと。これだけ社会が不安定になれば、10 年、20 年も同じ会社で働き続けようとする若者が減っていくのは当然だと思います。

「一生、同じ会社で働くななんて可哀想」。今、多くの若者たちがそう思っているでしょう。こういう考え方をしているから、「だから今の若い連中はダメなんだ」と言われてしまうのかもしれない。私は両方の気持ちがわかります。若者としては、「なんで同じ会社にずっといなければいけないの？ 飽きるし、つまらないし、他の仕事もしてみたい」という気持ちがある。それが正直な感想でしょう。3 年も働けば、仕事のノウハウも一通り学ぶこともできるし、次の仕事へのステップにすることもできる。3 年で仕事を辞めることをネガティブに考えるのではなく、ポジティブに捉えているのです。

そう考える若者たちは、社会の厳しさをよくわかっていないのかもしれませんが。「俺、もうこの会社で学ぶことはないっす。これだけやれば十分っす。もっとやりたいことが他にあるんでこれで新天地へ旅立ちます」。本当にそんなことを思っているのです。「会社に就職して、一生会社のために働き続ける」ことを最初から馬鹿にしている部分があります。会社で取引先にペコペコしている上の世代を馬鹿にしている。「なんで俺たちが会社の歯車にならなきゃいけないの？」とも考えています。だから簡単に会社を辞めて、つい旅に出てしまったり、カフェを開業したりしようとする。今よりも自分は、もっといい場所に行くことができると信じているのです。

ただし、それは決して不透明な未来を悲観し、刹那的に遊んでいるだけというわけでもないでしょう。近い将来に向けて身近な目標を立て、それに向かって努力している若者は大勢います。言うまでもなく、その努力が実を結ぶかどうかはわかりません。ただひとつ言えるのは、遠い将来をイメージして行動する若者より、近くて具体的な未来を意識して行動する若者のほうが多いということです。

福嶋麻衣子・いしたにまさき『日本の若者は不幸じゃない』

(ソフトバンク新書, 2011) による。出題の都合上、一部改変した。

## 課題文②

### 〈A〉

皆さんは、「宿命」という言葉から何をイメージされるでしょうか。どんな人生を思い描かれるでしょうか。おそらく現在40代から上の人たちにとって、それは自分の人生を縛り、不自由なものにする桎梏\*と捉えられている場合が多いのではないのでしょうか。しかし、現在30代から下の人たちにとって、それはむしろ自分の人生の基盤となり、そこに安定感を与えてくれるものと捉えられるようになっている場合が多いように見受けられます。

では、「努力」という言葉についてはどうでしょうか。おそらく、現在40代から上の人たちにとって、それは自分の能力や資質の不足分を補うための営みと捉えられていることが多いでしょう。しかし、現在30代から下の人たちにとって、

それはむしろ自分の能力や資質の一部を成すものと捉えられるようになってい  
る場合が多いように見受けられます。努力できるか否かもまた、自分の素質の一部  
と見なされるようになってい

内閣府が2018年に実施した「国民生活に関する世論調査」では、現在の生活  
に満足していると答えた人とまあ満足していると答えた人が併せて74.7%を占め  
て、過去最高の数値となりました。18歳から29歳までに限定すると、その数値  
はさらに83.2%まで上昇します。現在の日本では、人びとの格差化が進んでい  
るといわれるのに、生活に満足していると答える人が増えているのはなぜでしょう  
か。とりわけ若者たちは厳しい社会状況に置かれているはずなのに、生活に満足  
と答える人がさらに増えるのはなぜでしょうか。

この謎を解く鍵は、上に示した二つの言葉をめぐる世代の相違から透けて見え  
てくるように思われます。そして、その背景にあるのは、現在の日本社会がすで  
に成長期の段階を終え、いまや成熟期へ移行しているという事実です。また、そ  
の時代の変化を反映して、自分が後天的に獲得した地位や能力ではなく、自分に  
先天的に備わっている属性や能力こそが、自分の人生を規定する最大の要因であ  
り、また自分の人生に安定感と安心感をもたらしてくれると考える人びとが、現  
在の日本に増えているという事実でもあるように思われます。

注 極桎……自由を束縛するもの、の意。

## 〈B〉

2018年7月、西日本は記録的な豪雨災害に見舞われました。その被害がもっ  
とも大きかった地域の一つが岡山県<sup>そうじや</sup>総社市です。大量の雨によって住宅地の広範  
囲で土砂流入が発生し、また水分を吸収した薬品で化学工場が爆発するなど、甚  
大な損害を被りました。

そんな大災害に見舞われた翌日、同市のある高校生が、ツイッターで市長にこ  
んなメッセージを送りました。「突然、失礼します。これを見る暇はないかもし  
れませんが……。私たち高校生に何かできることはありませんか？ 配給の手  
伝いなどはできませんか？ 何かできるかもしれないのに家で待機しているだけ  
というのはとても<sup>つら</sup>辛いです。子どもだから、できることは少ないかもしれないで  
す。でも、ほんの少しでもできることはないですか？」と。同市長はこのメッセ



ージに対してすぐさま反応し、「総社市役所に手伝いに来てください」と、やはりツイッターでつぶやきました。すると翌日の朝には、千人を超える高校生のボランティアが市役所に集結したのです。(中略)

このエピソードが物語っているのは、現在の若者たちは、人間関係の内閉化や生活圏の分断化を、その気になれば軽々と乗り越える力をじつは備えもっているということです。そして、その力を引き出せる環境を作っていくのは、ほかならぬ私たち大人自身の役目だということです。総社市では、その前々年に九州で熊本地震が発生した際に、いち早く支援職員を同地へ派遣するなど、地域の垣根を越えたつながりの構築に取り組んでいました。その光景を日頃から目にしていた若者たちが、ここぞとばかりに立ち上がり、その潜在力を発揮してくれたのです。

ある問題に直面したとき、自分自身の能力でその解決が不可能なら、その能力に長けた人をインターネットで探してきて事態に対処する。自分に足りないピースがあったとき、わざわざ時間と手間をかけてそのピースを自分で作り出すよりは、そのピースを外部から探してきてさっと手早く埋め合わせてしまう。現在の若者たちは、そんな能力に長けています。そして、社会が平坦化している現在だからこそ、このような人的交流も可能になっているのだとすれば、それはまさに(1) 高原期の時代にふさわしい努力のかたちともいえます。

そもそも努力とは何でしょうか。昨今の若者たちが考えるように、努力できるか否かも生得的な属性の一部なのでしょう。生まれついた資質や才能に差があることを否定はしませんが、しかし本来は、その能力の足りない部分を補う営みこそ、努力という言葉の意味するところだったはず。だとすれば、個人の能力不足を自己完結的に補うのではなく、他者とのつながりによって補おうとする営みも、また努力の一つのかたちといえるのかもしれない。このように考え方を改めてみると、そして現在の若者たちのふるまい方を見れば、けっして努力への信頼感が失われているわけではないのかもしれない。

しかし、それでもなお、いま努力への信頼感に削がれている面があるとすれば、それは今日の社会の高原化によって、かつてのように超越的な目標を胸に抱きにくくなったからだと考えられます。だとしたら、内実のよく分からない異次元の目標のためになどではなく、その営みの過程それ自体を楽しむことで、努力を続けられるようにしてみるのも一つの手ではないでしょうか。それは、なにか別の

目標を実現するための人間関係ではなく、関係そのものを楽しむ自己充足的な人間関係を紡いでいくことでもあるはずです。そう考えれば、それはもうすでに多くの若者たちが営んでいるものだともいえます。

現在の若者たちは、シェアの世代ともいわれます。たとえば、クルマが必要になったらお金を稼いで買うのではなく、いま使っていない人から借りればよいと考えます。もちろん、ギブ&テイクですから、いま自分に使う必要のないものは、逆に誰かに貸してあげればよいと考えます。そうやって世界を広げ、分断壁を軽々と乗り越えていける力を持っているのも現在の若者たちです。彼らは、自分の能力不足に自身の内部を改良することで対応するのではなく、人間関係を新たに構築することで対応することのできる世代なのです。

今日のように流動性の増した社会で、一つのものごとに対してあまりにも強くこだわりすぎると、せつかく新しいチャンスが到来しているかもしれないときに、その兆しを見逃してしまうこともありえます。インターネットを活用し、全世界から絶えず新しい情報を摂取している若者たちは、そのリスクをよく心得ています。そのため、なにか特定のことに没頭することは、むしろ積極的に回避しようとしみます。だとすれば、ひたすら一つのこと集中することではなく、もっと臨機応変に人間関係を構築していけるように工夫を重ねることこそ、今日の努力のあり方なのだと考えを改めねばならないのかもしれないかもしれません。それが、高原期の社会に見合った努力のかたちなのかもしれません。

このように既成の概念を疑ってみることの意義は、宿命論的人生観についても同様に当てはまるものです。今日のそれが前近代的なそれと根本的に異なっているのは、理不尽な身分制度によって抑圧され、やむなく希望を諦めているわけではないという点にあります。しかし、前近代的な身分制度を理不尽だと考えるのは、そもそも私たちが近代人だからです。その時代を生きた人びとにはそれこそが自明の現実であって、たとえば、農民も努力次第で武士になれるなどとは夢にも思わなかったはずです。そして、現在の時代精神の落とし穴もじつはここにあります。

今日、生まれ持っていると考えられている素質や才能の多くも、じつは与えられた社会環境のなかで、かつての身分制度と同じくらい格差をともないながら、再生産されてきたものです。たとえば、いくら天才的なピアニストであろうと、

そもそも日常的にピアノに触れさせてくれ、定期的にレッスンに通わせてくれるような恵まれた成育環境になれば、その才能に目覚めることは難しかったはず。その点から見れば、それらの素質や才能もけっして生得的属性とはいいきれません。もちろん、生まれ落ちる環境を自分では選べませんから、その点については個人にとっての宿命であり、生得的属性であるかのように感じられます。しかしその環境も、社会制度の設計いかんでいかようにも変えていけるものです。そう考えれば、社会的に見るとそれも宿命などではありません。

このことは、現在の若者たちに見られる人間関係のマネジメント力の高さにも当てはまります。それは、彼らに生まれ備わった能力というよりも、むしろこの高原地帯を歩むなかで育まれてきたものです。生得的な素質などではなく、社会化による産物なのです。もちろん、彼らがこの時代に生まれ落ちたのは、自己選択の結果ではありません。したがって、その部分については宿命論が成り立つようにも見えます。しかし、ここでもピアニストの例と同じことがいえます。この高原期の社会をどのようなかたちにしていくかは、まさに私たちの自由選択に託されているからです。社会的に見れば、それもまた環境の産物なのです。

このように見てくると、今日の宿命論的人生観も、じつは前近代的なそれと本質的には違ってないといえます。作られた素質にもとづく社会的な境遇の違いを、あたかも生来的なものと思い込んでいるだけなのです。このように、本来は社会構造的な背景から生まれた格差でありながら、それをあたかも個人的な理由にもとづいたものであるかのように錯覚している状態を、イギリスの社会学者、アンディ・ファーロンとフレッド・カートメルは認識論的誤謬<sup>こびゅう</sup>と呼んでいます。

私たちの生活満足度は、自分の置かれている環境をどのように判断するかによって異なってきます。ここで視野が狭いと、その環境を客観的に見つめることが難しくなります。その結果、(2)たとえ劣悪な環境にあったとしても、その状況に対して不満を抱かなくなります。それは、疎外された状況に置かれているという認識それ自体からも疎外されていることを意味します。今日の若者たちの幸福感の強さは、社会的に排除されていることの認識からも排除された結果といえるのです。いわば二重化された社会的排除の産物なのです。

宿命論的人生観の下では、排除されていることを当事者に意識させないような排除が、したがって剥奪感<sup>はくだつかん</sup>さえ抱かせないような排除が、人知れず進行していきます。反発や絶望を覚えることもなく、「それが自分の宿命なのだ」と、納得を

もって淡々と迎え入れていってしまいます。だから今日の若年層では深刻な社会的格差があるにもかかわらず、生活満足度も上昇しつづけているのです。だとしたら、それはけっして望ましい現象とはいえません。それもまた認識論的誤謬の一側面にほかならないからです。

〈図〉

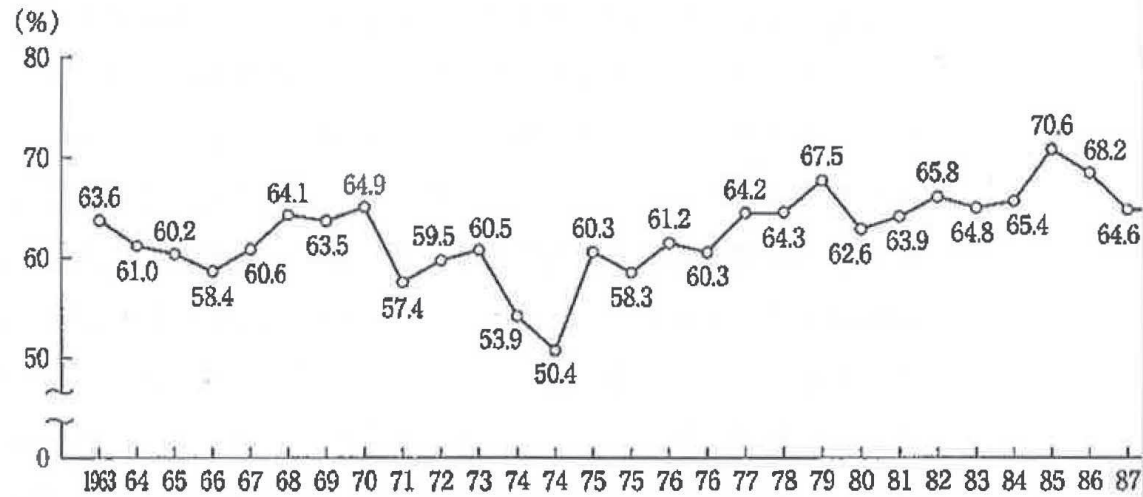


図 現在の生活に対する満足度

(内閣府「国民生活に関する世論調査」2018年6月調査)

(注1) 平成3(1991)年以前の調査

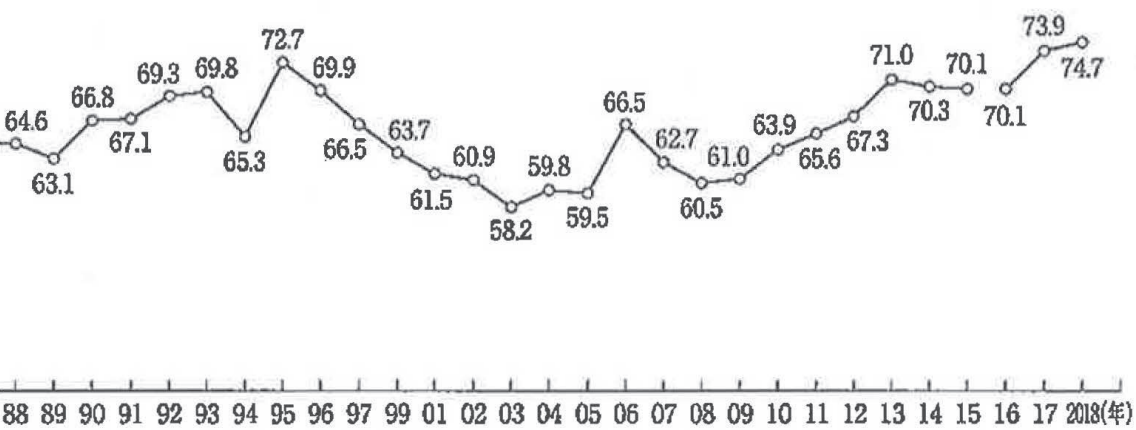
満足→「十分満足している」+「一応満足している」

平成4(1992)年以降の調査

満足→「満足している」+「まあ満足している」

(注2) 平成27(2015)年調査までは、20歳以上の者を対象として実施

平成28(2016)年調査からは18歳以上の者を対象として実施



土井隆義 『「宿命」を生きる若者たち——格差と幸福をつなぐもの——』

(岩波ブックレット, 2019) による。出題の都合上、一部改変した。



